

近世

第8章 幕藩体制の展開 2. 江戸時代の経済の仕組みと発展 (1) 農業と諸産業の発展

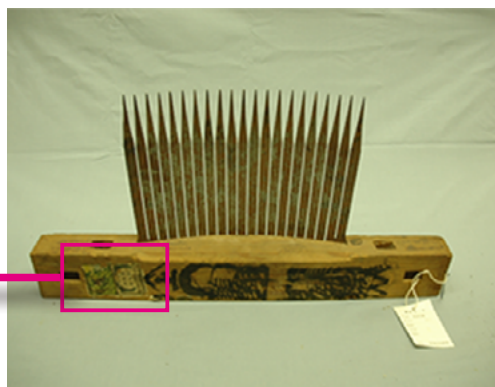
せんばこ
全国ブランドだった倉吉の千歯扱き



「倉吉の千歯扱き」(倉吉博物館蔵)★



倉吉産であることを示す表示★
「伯州倉吉稲扱」と記されている。



倉吉千歯の写真(倉吉博物館蔵)★
穂(歯の部分)は21本で湾曲している。

解説

■江戸時代の農具と千歯扱き

江戸時代になると農業技術が進歩し、農具の改良も進んだ。当時、全国各地に広く普及した農具の1つに「千歯扱き」がある。千歯扱きは木製の台木の上に鉄製の歯(「穂」という)を取り付けた農具で、主に脱穀に用いられた。この千歯扱きの登場によって、脱穀作業の能率は飛躍的に向上したと言われている。

■全国ブランドだった「倉吉千歯」

なかでも倉吉は、良質の鉄の生産を背景に、鍛冶集団を有し、早くから量産体制が整っていた。製品改良も進み、台木に穂を湾曲に取り付けることで、稲を引く力が均等にかかるような工夫も行われた。

加えて、倉吉千歯の大きな特徴は、職人自らが全国各地に出向き、製品の販売とともに、古い千歯扱きの下取りや修理を行っていたことである。いわゆるアフターケアが充実していたことも倉吉千歯の全国拡大につながった。



倉吉千歯の製造の様子(倉吉博物館蔵)★

製品が良質な上に、職人自ら全国を回って修理・販売を行った倉吉千歯は人気を博し、大正初めには全国生産量の約80%を占めたと言われている。

■国登録有形民俗文化財へ

大正時代に回転式足踏脱穀機が普及したことに伴い、千歯扱きはその役割を終えていく。現在、倉吉博物館には212点の千歯扱きと関連資料が所蔵されているが、稲作技術や千歯扱きの歴史を理解する上で貴重であると認められ、2015(平成27)年に国登録有形民俗文化財に指定されている。

(担当：岡村吉彦)

参考資料

・鳥取県『新鳥取県史 民具2 民具編』(2019年)

★の写真は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。